

願望文におけるガとヲの使い分けについて⁽¹⁾

米澤 優

1. はじめに

願望文⁽²⁾において、補文の動詞の目的語⁽³⁾の格標示に用いられる格助詞には、ガとヲがある。

- (1) a. 水が飲みたい。 b. 水を飲みたい。

従来、多くの研究で、このガとヲの使い分けについて述べられてきた。しかし、ガの使用についての条件は多く挙げられているものの、決定的な要因となるものについては明らかになっていないように思われる。本稿では、先行研究を捉え直し、願望文におけるガとヲの使い分けを決定付ける要因を、意味的な観点から明らかにすることを試みたい。

願望文が表す事態には<自然発生的欲求>と<理性的判断に基づく願望>があることを提案し、自然発生的欲求と解釈されやすい場合にガが選択されることを示したいと思う。

2. 先行研究とその問題点

2.1 先行研究

先行研究の主なものとして、田村(1969)、大江(1973)、久野(1973)、村木(1975)、柴谷(1978)、森田(1988)、庵(1995a, b)、山内(1997)、泉谷(1999)、藤村他(2004)などがある。

大江(1973)では、ガが用いられやすい条件として、以下の四つが挙げられている。

- (2) ガが用いられやすい条件⁽⁴⁾：
- ①内的感情の直接表現の場合
 - ②目的語が焦点⁽⁵⁾となる場合
 - ③動詞が話者に近づく方向性を持つ場合
 - ④動詞が意味的に空虚な場合⁽⁶⁾

ガよりヲのほうが使用範囲が広いため、上に列挙した先行研究ではガが用いられにくい条件としていくつか示されており、まとめると以下ようになる。

- (3) ガが用いられにくい条件⁽⁷⁾：
- <語彙的・統語的条件>
- ①口語化されていない漢語動詞の場合
 - ②定型表現の場合
 - ③目的語と述語が離れている場合
 - ④動詞が複合形の場合

<意味的条件>

- ⑤動詞が話者から離れるという方向性を持つ場合
- ⑥動詞の他動性が高い場合⁽⁸⁾
- ⑦目的語が人である場合
- ⑧目的語の意味役割が対象以外の場合

2.2 問題点

ガが用いられにくい条件として、前節に示したように先行研究で多くの条件が挙げられているが、これらの条件に抵触していないにも関わらず、以下のようにガが許容されにくい場合がある。

- (4) (10 倍の量のラーメンを完食すると賞金がもらえるという状況で) お腹がいっぱいだけど、このラーメンを／??が食べたい。
- (5) (飲み会の場をしらけさせないために) お腹が張っているけど、この酒を／??が飲みたい。
- (6) のどは乾いてないが、炎天下で倒れないために、水を／??が飲みたい。

逆に、ガが用いられにくい条件に抵触しているにも関わらず、ガが許容される場合がある。まず動詞の意味に関する条件について見ると、(3)の条件⑥に反し他動性が高いが、(7)のようにガが許容されている例がある。また、庵 (1995a, b) で既に指摘されているが、(3)の条件⑤に反し話者から離れるという方向性を持つ動詞でも、(8) (9) のようにガが許容される場合がある。

- (7) 結局のところ、少年 (もちろん、少女も) だって、当然、人が殺したいし戦争がしたい。
(「平成九年のフットボール」)

- (8) a. 英語?が／を教わりたい。 b. 英語が／を教えたい。 (庵 (1995a, p. 61))
- (9) 栄二はさぶと飲みにも出て、おすえのことが話したかった。 (『さぶ』)

目的語に関する条件について見ると、(3)の条件⑦の目的語が人を表す語でも、(10)のようにガが許容されている場合がある。また、杉本 (1986) や山内 (1997) でも指摘されているが、(3)の条件⑧に反し経路を表す場合でも、(11)のようにガが許容される場合がある⁽⁹⁾。

- (10) 要するに彼は一ト月程見ないお清が見たかった。 (『小僧の神様・城の崎にて』)
- (11) (自由に空を飛ぶ鳥を見て) ああ、私も空が飛びたい。 (山内 (1997, p. 163))

以上のことから、(3)の意味的条件の再検証が必要であると思われる。

3. 新たな条件の検証

(3)の条件に抵触していないにも関わらず、ガが許容されない場合があることは、前節で述べたとおりである。なぜ先に挙げた(4) (5) (6)の例でガが許容されないのか、(3)で挙げた条件以外にガが用いられにくい条件があるか考えてみたい。

3.1 欲求の度合い

Makino & Tsutsui (1986) では、ガとヲの選択は「欲求の度合い」によると述べられている。欲求の度合いが強いとガが選択され、欲求の度合いが弱いとヲが選択されると、(12)(13)の例を挙げて説明している⁽¹⁰⁾。

(12) [Situation: The speaker has just run five miles.]

私は水が／?を飲みたい。

(13) [Situation: The speaker has been told by a doctor to drink as much as possible. That is, he feels he has to drink water.]

私は水を／?が飲みたいが… (my stomach doesn't accept it anymore.)

(以上、Makino & Tsutsui (1986, p. 444))

この二例を比べると、確かに(13)のほうが欲求が強い。しかし、「欲求の度合い」という観点からだけでは、ガとヲの使い分けは説明できないように思われる。なぜなら、(14)のように欲求の度合いがそれほど強くないと思われる場合でも、ガが許容される例があるからである。

(14) a. なんとなく酒が／??を飲みたい。 b. なんだか酸っぱいものが／??を食べたい。

「なんとなく」という副詞は、島本編 (1989, p. 139) には「どこがどんなにそのようなのか、はっきり説明できないが、少し」とあり、欲求の度合いとしては弱いことを表している。「なんだか」という副詞も同様である。欲求の度合いとしては弱いにも関わらず、ガが用いられる。このことから、(12)(13)のガとヲの許容度の差を「欲求の度合い」によるものとするのは不十分であると言える。

3.2 <自然発生的欲求>と<理性的判断に基づく願望>の提案

ここで、Makino & Tsutsui (1986) のように欲求を強弱という度合いで捉えることをやめ、欲求のタイプとして<自然発生的欲求>と<理性的判断に基づく願望>があるということを提案したい。ここで言う<自然発生的欲求>とは、話者の理性とは関係なく、無意識に沸き上がった欲求のことである。これは、例えば以下の例のような場合である。

(15) (お腹が空いている時、ラーメン屋の前を通過して) ああ、ラーメンが／??を食べたい。

(16) 喉がひりひり、やすりを当てたように痛んでいる……内臓が、汚物処理場のように、泡をたてている……タバコが吸いたい…… (『砂の女』)

「ああ」などの感動詞を伴うと、自然発生的欲求であるとより明らかになる。これは、大江(1973)で述べられていた、ガが用いられやすい条件(2)の①内的感情の直接表現を捉え直したものである⁽¹¹⁾。「内的感情」とはどのようなものか規定されておらず漠然としているので、その感情(欲求)が自然発生的なものであると、より詳しく規定したい。自然発生的欲求の場合、ヲよりガが選択されやすい。

<理性的判断に基づく願望>とは、そうすることが望ましいなどという理性的判断に基づき、そうしたいという話者の意図が入った願望である。これは以下の例のような場合である。

(17) (10 倍の量のラーメンを完食すると賞金がもらえるという状況で) お腹がいっぱいだけど、このラーメンを／??が食べたい。(= (4))

(18) 「お名前を知りたい。そうでなければどうして連絡ができよう。このままとは、あなたも思われないでしょう」 (『新源氏物語』)

(17)は、賞金を手に入れるにはラーメンを食べなければならないという判断に基づいており、(18)は、連絡するには名前が分かっているなければならないという判断に基づいている。先に挙げた(5)(6)も、「お酒を飲まないと場がしらける」や「水を飲まないで炎天下で倒れる」という話者の判断がある。前節で挙げた(13)も、「医者にできるだけ多く水を飲むように言われて、話者もそうしなければならないと感じている」とあり、話者の判断に基づいている。これらは、生理的には欲していないが、目的のためにそうすることが望ましいという話者の理性的な判断に基づき、そうしたいという願望を表している。この場合、ガは許容されにくく、ヲが選択される。

このように、ガとヲの選択は、「欲求の度合い」によるものではなく、自然発生的欲求か理性的判断に基づく願望かという違いによるものであると言えるのではないであろうか。この観点の妥当性を、副詞との共起から検証してみたい。

(19) a. なんとなく派手な服が／??を着たい。

b. なんだかジャズが／??を聞きたい。

c. むしろに海が／??を見たい。

d. 妙に酸っぱいものが／??を食べたい。

これらはガを用いることができ、また、ヲよりガを用いるほうが自然であると感じられる。「なんだか」などのこれらの副詞は、「なぜそうなのかということが説明できない」という意味である。なぜそうしたいかが説明できないということは、自分の理性とは関係なく自然に沸き上がった欲求であると言える。このように、自然発生的欲求である場合、欲求の強弱に関わらず、ガが選択されやすくなるのである。

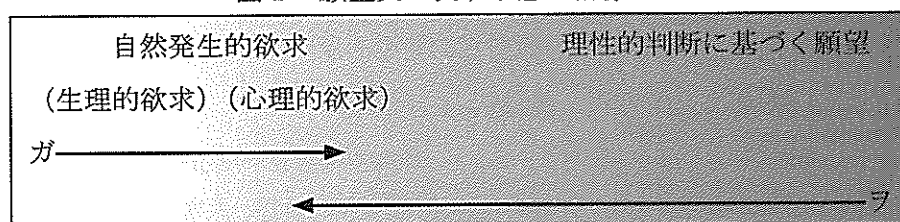
以上で、願望文が表す事態には、自然発生的欲求と理性的判断に基づく願望がある⁽¹²⁾と示したが、これらは、完全に分けられるものではなく、図1に示すように、連続的なものであると考える。自然発生的欲求の場合にガが選択されやすく、話者の意図が入る理性的判断に基づく願望の場合にはヲが選択される。また、自然発生的欲求の中でも、低次の欲求とされている「食べる」「飲む」など生理的欲求⁽¹³⁾の場合に、最もガが選択されやすい。「見る」などの心理的欲求⁽¹⁴⁾の場合、ガも用いられるが、ヲもよく用いられている⁽¹⁵⁾。

(20) 彼はそのまま真直ぐ歩いていった。夕暮れの海が見たいという気持が、ふと頭に浮き上がったからである。 (『孤高の人』)

(21) 源氏は胸さわぐ。お姿を見たい。几帳を押しやって、お顔をながめたい、と男の好色ところはとめどない。 (『新源氏物語』)

つまり、自然発生的欲求と捉えられやすいものほど、ガが選択されやすいのである。自然発生的欲求の中でも低次の生理的欲求や、(19)のように副詞で自然発生的欲求であると明示される場合に、ガが選択されやすい。

図1 願望文が表す事態と格標示



ガの選択には、自然発生的欲求と捉えられやすいこと、つまり話者の理性的判断や意図が入らないことが重要である。このことから、ガが用いられにくい条件として、新たに<話者の意図が入る場合>を付け加えたい。

対象をガでマークする他の構文についても、同じことが言えるのであろうか。(22)のように可能文も、願望文と同様に対象をガでもヲでもマークできる。牧野(1978)に、ガでマークされた可能文は自発性を表すが、ヲでマークされた可能文は自発を表しにくいとの指摘がある。(23)のように「自然に」「なんとなく」など自発的であることが明示されると、ヲは許容されにくくなる。

(22) a. 太郎は詞が／を書ける。 b. 太郎は絵が／を描ける。

(23) a. 太郎は自然に(すらすら、とめどなく)詩???を／が書ける。(牧野(1978, p. 194))

b. なんとなく筆を動かしているうちに、絵*を／が描けてしまった。

他に、対象をガでマークするのは、感覚動詞や感情形容詞などの状態述語であるが、これらも全て、非意図的・自発的である。

(24) a. 山が見える。 b. 太郎は英語が分かる。

c. 太郎は花子が好きだ／こわい。

このように、対象がガでマークされる構文は自発的・非意図的であることから、願望文で話者の意図が入らない自然発生的欲求の場合にガが用いられることは自然なことであると思われる⁽¹⁶⁾。

4. 条件の再検証

新たに提案した<話者の意図が入る場合>という条件を踏まえ、(3)の条件を再検証したい。ここでは、問題点として挙げた意味的条件についてのみ見ていきたいと思う。

4.1 動詞の意味に関する条件

4.1.1 動詞の他動性

庵 (1995a, b) で指摘されているように、他動性が高い動詞の場合、何の文脈もないと、ガが許容されにくいのは確かである。

- (25) a. 太郎??が／を殴りたい。 b. 太郎??が／を殺したい。

ただし、文脈で話者の判断・意図が入る余地のないことが明白になっていれば、ガが許容されやすくなる場合がある。(26)は「むしように」という副詞、(27)は文脈で、そこに話者の意図が入る余地のないことが明白である。(27)は殺意の衝動の話があり、それを受けたものである。

- (26) 時たま、暴れだしたくなる。無性に人^が殴りたい。

(<http://blog.goo.ne.jp/ojlsgeu0jjes6sq/m/200511>)

- (27) 結局のところ、少年（もちろん、少女も）だって、当然、人^が殺したいし戦争がしたい。

(= (7))

(「平成九年のフットボール」)

また、以下のように、他動性が低くてもガが許容されない場合もある⁽¹⁷⁾。

- (28) a. この街*が／を愛したい。 b. 彼の話*が／を信じたい／忘れない。

これらの動詞は意志的な行為を表すものではないが、主語のコントロールのもとにあるものと捉えられている。「そうするように努力したい」ということを表すので、話者の意図が入る。つまり、理性的判断に基づく願望であると言える。そのため、ガが許容されないのである。

以上のことから、他動性の高低よりも、自然発生的欲求と捉えられやすいかどうか、話者の判断・意図が入るかどうかで、ガの許容度が左右されると言える。

4.1.2 動詞の方向性

2.2 で述べたように、話者から離れる方向性を表す動詞でガが許容される場合がある。

- (29) 栄二はさぶと飲みにも出て、おすえのことが話^がしたかった。(= (9)) (『さぶ』)

また、以下のような身体に関わる生理的な欲求は、話者から離れる方向性を持つ動詞でもガが許容されやすい⁽¹⁸⁾。

- (30) (足がむれていて) 靴下^が／を脱ぎたい。

- (31) (目にゴミが入って) コンタクト^が／を外したい。

これらは自然発生的欲求であると解釈されやすいので、ガが選択されやすいと思われる。

4.1 をまとめると、他動性が高い場合や話者から離れる方向性の場合に自然発生的欲求と捉えにくいものは確かにある。しかし、自然発生的欲求と解釈しやすい場合は、ガが選択されやすくなる。また、他動性が低い場合でも、話者の意図が入ると、ガは選択されにくい。以上のことから、動詞の意味に関する条件は、話者の意図が入る場合という条件にまとめられると思われる。

4.2 目的語に関する条件

4.2.1 目的語が人を表す語の場合

村木（1975）などでは、動作主との混同が起こるので、目的語が人を表す語の場合は、ガが許容されにくいと述べられている。しかし、先に挙げた(10)や4.1.1で挙げた例のように、目的語が人を表す語でもガが用いられている場合がある。目的語が人を表す語であっても、自然発生的欲求であると解釈されれば、ガは許容されやすくなるのである。しかし、人が目的語の場合、実例を見ると、(32)のようにヲをとるもののほうが多いので、自然発生的欲求と解釈されやすければ、この条件が弱められることもあるということであろう。

(32) 面影は胸から去らず、恋しい。

あの姫君を見たい。

あの人を抱きしめたかった。

（『新源氏物語』）

4.2.2 経路の場合

杉本（1986）や山内（1997）で指摘されているように、経路でもガが許容される場合がある。(33)のように鳥を見て「空が飛びたい」、(34)のように山歩きが好きな人が「山が歩きたい」と思うのは、自然なことである。また(35)のようにテレビなどで明石海峡大橋を見て「渡りたい」という感情が引き起こされるのも、自然なことである。話者の意図が入らず、自然発生的欲求であると捉えられやすい場合、ガが許容されやすくなる。

(33) （自由に空を飛ぶ鳥を見て）ああ、私も空が飛びたい。（＝(11)）（山内（1997, p. 163））

(34) カーテンを開けると前日の雨が嘘のように晴れて、あたたかい空気。しばらく山歩きを
していなかったので、こんな日は山が歩きたいっ、いそいそと着替えて、……

(http://esl.ciao.jp/mountain/031116_bukkasen/031116bukkasen.html)

(35) 最初はおーママがかねてからしつこい位に明石海峡大橋が渡りたい、淡路花博に行きたい
いって行ったから、……。

(<http://park3.wakwak.com/~satomio/sato/entatu/000615.html>)

しかし、(36)のようにヲが用いられている例のほうが多く、目的語が人の場合と同じく、自然発生的欲求と解釈されやすければ、弱められることもあるという条件であると思われる。

(36) 「ううん、大丈夫なの。ずっと明るい道ばかりだから。それに、私、少し外を歩きたい
の」

（『太郎物語』）

4.2 をまとめると、自然発生的欲求であっても、目的語が人の場合や経路の場合は、ガが用いられないことも多い。しかし、許容される例が確かにあることから、自然発生的欲求と捉えられやすい場合に、目的語の条件が弱められることもあると分かる。目的語が人でなくモノであっても、意味役割が対象であっても、話者の意図が入ると、ガは許容されなくなることから、話者の意図が入る場合という条件のほうが強く働いていると思われる。

5. おわりに

本稿では、願望文のガとヲの使い分けについて意味的な観点から議論し、次の四点を示した。

- 1) 願望文の表す事態には、自然発生的欲求、理性的判断に基づく願望がある。
- 2) 話者の意図の入る余地のない自然発生的欲求の場合に、最もガが選択されやすく、話者の意図が入る理性的判断に基づく願望の場合には、ヲが選択される。
- 3) 先行研究ガが用いられにくい条件であるとされている動詞の他動性が高い場合や目的語が経路の場合などでも、文脈や副詞などで自然発生的欲求であると明示され、自然発生的な欲求と捉えられやすくなれば、ガの許容度は増す。
- 4) 動詞の意味に関する条件については、新たに提案した<話者の意図が入る場合>という条件にまとめられる。目的語の条件については、自然発生的欲求と捉えられやすい場合、その条件が弱められ、ガが選択されることもある。このことから、意味的な条件の中で最も強く働くのが、<話者の意図が入る場合>という条件であると言える。

残された課題は多い。まずは語彙的・統語的条件と意味的条件の関係や、ガとヲの選択が意味論上の問題か語用論上の問題かということをもっと精密に検討する必要がある。また、可能文、難易文や「好きだ」などを述語とする文でのガとヲの使い分けなども検討していきたいと考える。

注

- (1) 本稿は、日本語文法学会第4回大会での口頭発表をもとに、加筆修正を行ったものである。席上及び発表後、多くの方々に貴重なコメントを賜った。ここに記して心より感謝申し上げたい。
- (2) 本稿では、ガとヲの交替が起こる「～シタイ」のみ考察の対象とする。
- (3) 補文中の動詞の目的語のことで、以下目的語と表す。なお本稿では、ガでマークされた語が文の主語か目的語かという議論には踏み込まない。
- (4) 例文をここに示しておく。先行研究の例文は文法性の判断を含めた形で引用する。また、下線や括弧などの表記は筆者が統一した。
 - ① a. ああ水が飲みたい b. ?ああ水を飲みたい (大江 (1973, p. 4))
 - ② a. ?窓がしめたい b. 窓をしめたい (大江 (1973, p. 3))
 - c. あの窓がしめたい (大江 (1973, p. 4))
 - ③ a. 英会話を／が習いたい (大江 (1973, p. 5))
 - b. 真相を／が聞きたい (大江 (1973, p. 6))
 - ④ a. 英語の勉強がしたい b. 柔道の稽古がしたい (大江 (1973, p. 8))
- (5) 本稿では、総記のガと焦点のガを区別して捉え、総記のガは考察の対象から外す。
- (6) 藤村他 (2004) では、ヲが用いられやすいと述べられているが、新聞を資料としているた

(i) 俵瀬へ帰りたい…… 利根の川べりで母に会った夢を見ながら冬の近い下宿の一室で吟子は眠り続けた。 (『花埋み』)

(ii) 「実は山本次官にも会いたいと思っている。海軍で戦争をやめさせることの出来る人は、山本さんしかいない。九月三日に訪ねて行きたいが、あなたからあとで電話で一つ連絡をとっておいてくれないか」 (『山本五十六』)

また、口頭発表では、願望文が表す事態には、「スル」や「ショウ」に置き換えられるく意志表明>もあるとして、以下の例を挙げたが、これは語用論的な意味であるとする。

(iii) 少し雑談をしてみたい。

筆者は、浪華の東郊、小阪という小さい町に住んでいる。 (『国取り物語』)

この場合、ガが用いられにくいことから、理性的判断に基づく願望が文脈で得られる用法であると思われる。この点については、別稿を用意したい。

- (13) 生熊 (1988) によると、心理学では欲求を二つの一般的なカテゴリーに分類している。一つは、一次的欲求と呼ばれる、飢餓、渇き、呼吸、排泄、睡眠、休息、苦痛回避などの生理的欲求である。もう一つは、二次的欲求と呼ばれる、達成欲求、親和欲求、依存欲求、承認欲求、攻撃欲求などの社会的欲求である。Murray (1938) では、生理的欲求と心理的欲求の二分類であるが、Maslow (1970) では、重要性の順序によって下位のものから生理的欲求、安全欲求、所属・愛情欲求、承認・自尊欲求、自己実現欲求という五つの階層に分け、下位の欲求が充足されないと上位の欲求は生じないと述べられている。
- (14) Murray (1938) では、心理的欲求とされているが、生熊 (1988) では、外部の刺激によって喚起される内発的欲求は別に分類されており、感性欲求、好奇欲求、活動欲求、操作欲求などの認知欲求に還元できるものがこれに含まれるとしている。
- (15) 小説 46 冊を資料として願望文におけるガとヲの分布を調べたところ、単純形の場合の上位は、ガ (全 120 例) は「見る」(24 例)、「する」(17 例)、「食べる」(14 例)、「聞く」(11 例)、「飲む」(10 例)、「知る」(10 例) で、ヲ (全 967 例) は「する」(109 例)、「見る」(53 例)、「知る」(39 例)、「やる」(22 例)、「聞く」(16 例)、「つける」(16 例)であった。
- (16) 古くは湯澤 (1944)、橋本 (1969) などに、ガでマークされる場合は、「動詞+タイ」が一つの形容詞のようになるとの記述がある。Sugioka (1984) では、[[英語を話し]たい]が再分析され、[英語が[話したい]]と一つの形容詞述語として再解釈されるためにガが付与されるとし、岸本 (2005) でも、これを支持している。「動詞+タイ」が一つの形容詞のようになることによって、自然発生的であることが表せるのではないと思われる。
- (17) 庵 (1995a, b) では、他動性の低さを確かめるテストとして、直接受身となるかどうかを挙げているが、これらも直接受身にはならない。

(18) 身体に関わる生理的な欲求は、方向性がない場合でも、以下のようにガが許容されやすいと思われる。しかし、(iv)や(30)(31)の許容度に個人差はある。

(iv) a. 背中が搔きたい。

b. 手が洗いたい。

用例出典

阿川弘之『山本五十六』／阿部公房『砂の女』／志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』／司馬遼太郎『国盗り物語』／曾野綾子『太郎物語』／田辺聖子『新源氏物語』／新田次郎『孤高の人』／山本周五郎『さぶ』／渡辺淳一『花埋み』 以上、『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』より
川島誠(1997)「平成九年のフットボール」『日本児童文学』43-5

<http://blog.goo.ne.jp/ojlsgeu0jjes6sq/m/200511> 2006年3月25日閲覧

http://esl.ciao.jp/mountain/031116_bukkasan/031116bukkasan.html 2006年3月25日閲覧

<http://park3.wakwak.com/~satomio/sato/entatu/000615.html> 2006年3月25日閲覧

参考文献

庵功雄(1995a)「ガ～シタイとヲ～シタイー格表示のゆれに関する一考察」『日本語教育』86
_____(1995b)「ガ～シタイとヲ～シタイー直接目的語の格表示のゆれ」『日本語類義表現の文法』
くろしお出版

生熊譲二(1988)「第2章 欲求と感情：欲望と喜怒哀楽の心理」『図説心理学入門』誠信書房

泉谷双蔵(1999)「「たい」構文における「をーが」交替に関する一考察」『日本語・日本語教育論集』
6 名古屋学院大学

大江三郎(1973)「願望のタイの前でのヲとガの交替」『文学研究』70 九州大学文学部

岸本秀樹(2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版

久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店

_____(2005)「日本語の「非規範的二重主語構文」についてー目的語表示の「が」ー」『言語学と
日本語教育IV』くろしお出版

柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館書店

_____(2001)「日本語の非規範的構文について」『言語学と日本語教育II』くろしお出版

島本基編(1989)『日本語学習者のための副詞用例辞典』凡人社

杉本武(1986)「格助詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

田村すず子(1969)「日本語の他動詞の希望形・可能形と助詞」『早稲田大学語学教育研究所紀要』

村木新次郎(1975)「「水を飲みたい」のに「水が飲みたい」とは？」『新・日本語講座2』汐分社

橋本進吉(1969)『助詞・助動詞の研究』岩波書店

- 藤村逸子・寺島啓子・寺島佳子・萩原由貴子・大曾美恵子(2004)「「が」と「を」の交替と「他動性」—コーパスを利用した検証—」『日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコミュニケーション研究 報告論文集』科学研究費補助金報告書
- 牧野成一(1978)『ことばと空間』東海大学出版会
- 森田良行(1988)『日本語の類意表現』創拓社
- 山内博之(1997)「願望文におけるガとヲの選択について」『岡山大学文学部紀要』27
- 湯澤幸吉郎(1944, 復刻 1980)『現代語法の諸問題』勉誠社
- Hopper, P.J. and S.A. Thompson. (1980). Transitivity in grammar and discourse. Language. Vol.56, No.2
- Jarkey, N. (1999). Case Marking of Objects of Stative Predicates in Japanese. Australian Journal of Linguistics, Vol.19, No.2.
- Makino, S and M Tsutsui. (1986). A Dictionary of Basic Japanese Grammar. The Japan Times.
- Maslow, A. H. (1970). Motivation and Personality(Second Edition). Harper & Row. (小口忠彦訳(1987)『改訂新版 人間性の心理学』産能大学出版部)
- Murray, H.A. (1938). Explorations in Personality. Oxford University Press. (外林大作訳(1961)『パーソナリティ』誠信書房)
- Sugioka, Y. (1984). Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English. Doctoral dissertation. University of Chicago.(Reprinted: Garland, 1985)
- Tada, H. (1992). Nominative Object in Japanese. Journal of Japanese Linguistics, Vol.14.